



新・湯治の取組 ～地域資源の魅力をかした温泉地の活性化～

坂 口 隆¹⁾

(令和 6 年 10 月 18 日受付, 令和 6 年 11 月 6 日受理)

Promotion of “*Shin-Toji*” Initiatives —Revitalization of Hot Spring Areas Utilizing the Charm of Local Resources—

Takashi SAKAGUCHI¹⁾

1. はじめに

我が国における温泉の利用は、長い歴史を有しており、古くは 1,300 年前の「古事記」や「日本書記」や各地域の「風土記」に記録が残されています。温泉は地域の自然やその時々の人々の暮らしと密接な関わりを持ちながら、山深い奥地から海辺まで全国各地に多様な温泉地を形成するとともに、近年では、地域の重要な観光拠点として発展し、国民の保養の場として親しまれています。

温泉の利用については、上述のとおり、古くは飛鳥・奈良時代の天皇の御行幸などの記録が残されていますが、戦国時代から江戸時代にかけては、温泉地に長期にわたって滞在し、入浴によって病気やケガの治療、農閑期で疲れた体の休養などを行う「湯治文化」が発達し、温泉地は人々の生活史の一部として、重要な役割を果たしていました。

その後、江戸時代の後期から明治時代にかけて、人々の温泉利用は「湯治」を目的とした長期滞在から短期の「保養・休養」や「観光」を目的とした利用へと大きく変化しました。

昭和に入ると戦後の高度経済成長やバブル景気の中で、会社や地域団体の忘年会・新年会や慰安旅行などの団体利用が最盛となり、これに合わせて旅館・ホテルの大型化が進みました。この間、一部の温泉地では歓楽街化が進み、ゆっくりと温泉入浴や温泉街の町並み、周辺の自然などを楽しむのではなく、宴会を主な目的とした利用が進み、温泉地は「単なる宴会の場となってし

¹⁾環境省 自然環境局 温泉地保護利用推進室。 ¹⁾Office for Conservation and Promotion of Hot Springs, Nature Conservation Bureau, Ministry of the Environment Japan.

* A new style of stay at a hot spring where you not only bathing in hot springs, but also refresh your body and mind while enjoying the surrounding nature, history, culture, food, and other local resources.

まった。」という指摘もされるなど自然の恵みである温泉や温泉地の周辺に豊富にある地域資源を十分に活用することができていたかは疑問があります。

平成に入り、温泉地を含む観光業界は、バブル経済の崩壊とこれに起因する日本経済の景気の低迷による団体旅行の急減など大きな事業環境の変化に直面しました。これらの変化に対応できなかった旅館・ホテルやその他の観光施設は廃業を余儀なくされ、温泉地の活気も失われ、休業している施設や廃墟として残されている施設などが散見される温泉地も各地に見られるようになり、徐々に温泉利用を伴う宿泊施設数も減少してきました。

昨今の温泉地を取り巻く環境は、旅行形態の変化や旅行者ニーズの多様化、インバウンド需要の急増など、大きな変化を見せています。我々が、温泉の恵みを将来にわたって享受するには、このような変化にも柔軟に対応できる持続可能な温泉地づくりを進めることが求められています。このため、環境省では平成29年度から地域資源をいかした温泉地の活性化策として「新・湯治（平成29年7月）」の取組を推進しています。

2. 我が国の温泉の現状

我が国の温泉地の宿泊者数は、バブル経済の崩壊直後の平成4年度（1992年）の1億4,325万人をピークに長期的には減少傾向となっており、リーマンショックや東日本大震災などによる経済の低迷の影響も受けて1.2億人まで減少しました。近年、新型コロナウイルス感染症の流行期を除くと近年は1.3億人前後で横這いの推移を示しています（図1、環境省、2022）。また、宿泊者数と同様に温泉を有する宿泊施設の数も平成7年度（1995年）をピークに長期的に減少傾向を示しています（図1）。

一方で、温泉を利用する公衆浴場の数は、ふるさと創生事業を契機とした自治体による温泉掘削や温泉を有する公衆浴場（スーパー銭湯）の増加などもあり、平成に入ってから右肩上がりに増加しました（図2、環境省、2022）。

このような温泉利用状況の動きを見ると、観光地としての温泉の需要は後退したものの、我々日本人にとって温泉は身近で不可欠なものであり、温泉が好きで温泉に入りたいという温泉に対するニーズには大きな変化はないことが推察されます。

また、令和5年（2023年度）の訪日外国人消費動向調査によると、日本に来訪した外国人が「今

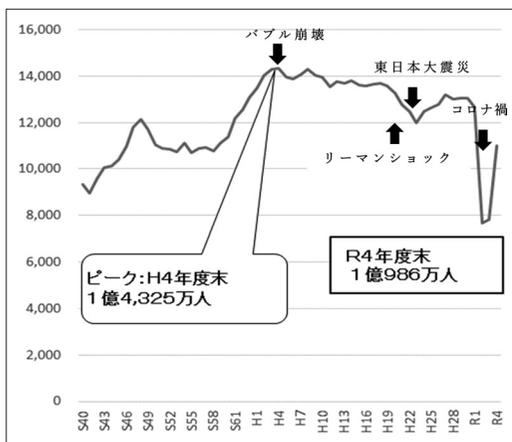


図1 温泉利用施設における宿泊者数

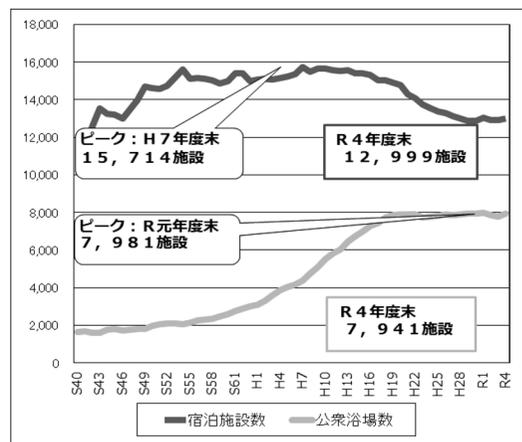


図2 温泉利用の宿泊施設数・公衆浴場数

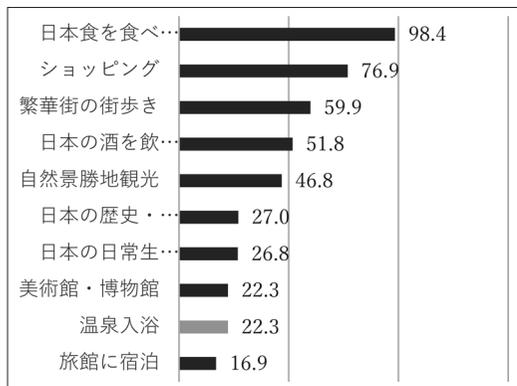


図 3 訪日外国人が来日時にしたこと

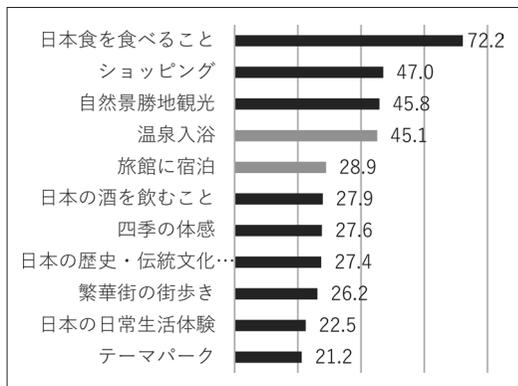


図 4 訪日外国人が次の来日でしたいこと

「回したこと」について、20 の設問のうち 9 番目に「温泉入浴」が位置し、「次に日本に来た際にしたいこと」については、20 の設問のうち 4 番目に「温泉入浴」、5 番目に「旅館への宿泊」が位置しており、訪日外国人旅行者の「温泉」への興味・関心の高さが伺え、温泉利用に対する新たな需要も生まれつつあります (図 3, 図 4, 観光庁, 2023)。

3. 「新・湯治」の取組について

高度経済成長期以降の温泉地を取り巻く状況を振り返る中で、環境省では「温泉地がもつリフレッシュ効果や温泉地周辺の自然景観や歴史・文化など温泉地が持つ地域資源の魅力を十分に活用できていないのではないか」という問題意識を持ち、あらためて温泉地の役割を見直し、再活性化に向けた方向性を議論することを目的として有識者会議を設置しました。この検討会での議論を経て、平成 29 年に『自然等の地域資源を活かした温泉地の活性化に向けた提言～「新・湯治-ONSEN stay」の推進～」をとりまとめたいただき、この「新・湯治」の取組を進めています (環境省, 2024)。

「新・湯治」とは、従来の「湯治」から抱くイメージである「主に温泉入浴を中心とした療養」を含みつつ、より積極的に周辺の自然環境や歴史・文化・食等の地域資源に触れ合えるようなプログラムを経験し、温泉地の持つ地域資源も魅力として楽しみながら、心身ともにリフレッシュする、現代のライフスタイルに合った新しい温泉地の過ごし方です (図 5, 環境省, 2024)。

4. 伊豆半島の地域資源

温泉や温泉地周辺が持つ地域資源を活用するためには、まず、どのような資源が地域にあり、地域を特徴づけるのか、様々な地域資源のつながりとこれらを取り巻く自然的・社会的条件がどのようなになっているのかを知ることが重要になります。

第 77 回日本温泉科学会においては、伊豆半島最古の温泉地である修善寺温泉が会場となることから、地域資源の魅力をどのようにいかしていくか考えるための端緒として、修善寺温泉や周辺の伊豆半島の地域資源にどのようなものがあるのかを取り上げてみます。

4.1 伊豆半島の成り立ち

日本列島は、アムールプレート（ユーラシアプレート）、オホーツクプレート（北米プレート）、フィリピン海プレートの3つのプレートの境界にあり、伊豆半島は日本の国土の中で唯一フィリピン海プレート上に位置しています（図6、伊豆半島ジオパーク推進協議会，2024）。

半島の東側はフィリピン海プレートがオホーツクプレートに沈み込む相模トラフの西端が位置する相模湾、半島の西側は、フィリピン海プレートがアムールプレートに沈み込む南海トラフの東端が位置する駿河湾に挟まれる地殻活動が活発な地域となっています（図7）。

伊豆半島は、約2,000万年前には本州から数百キロ離れた海底火山群だったとされており、その後、フィリピン海プレートの沈み込みとともに北上しながら、約200～100万年前の火山活動に伴う隆起や丹沢山系からの土砂の堆積により陸化が進行し、島が形成され、この島が約60万年～20万年前に本州とぶつかって接続し、ほぼ現在の姿になりました（図8、日本ジオパークネットワーク，2024）。

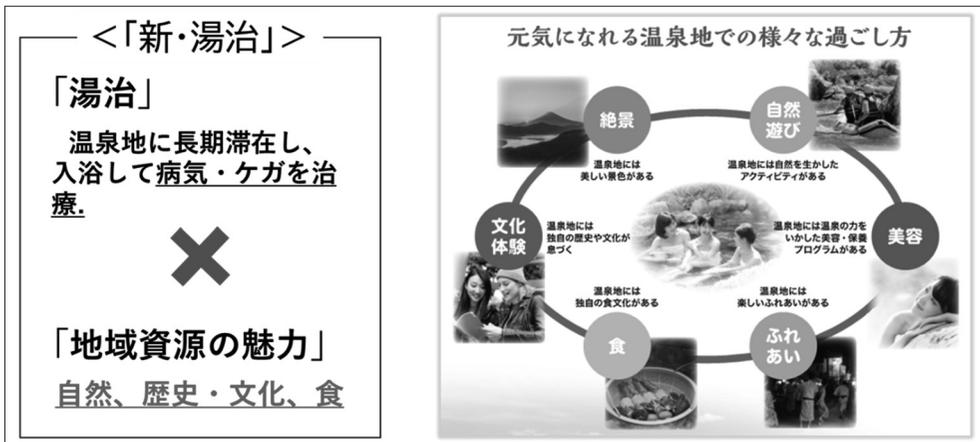


図5 「自然等の地域資源を生かした温泉地の活性化に向けた提言」の概要

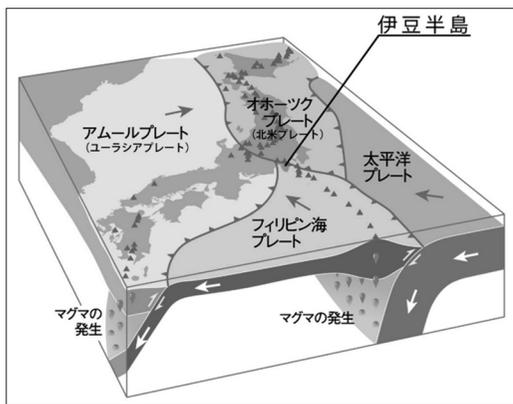


図6 伊豆半島とプレートの位置関係

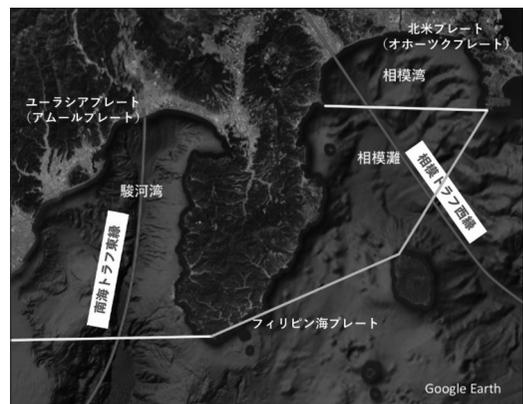


図7 伊豆半島沿岸の海域

このため、伊豆半島は、地球科学的に特異な位置付けにあり、「世界でも類を見ない活動的な島弧どうしの衝突の場である伊豆半島は、世界的にも特異な成り立ちを反映し形成された美しい自然景観や生態系、これにより育まれた歴史・文化を有する。」と評価され、2018年にユネスコ世界ジオパークに登録されました。

伊豆半島ユネスコ世界ジオパークのテーマは、「南から来た火山の贈りもの」となっています。伊豆半島は、学術的にも貴重で観光的にも地域の魅力となっている自然景観や日本三大深湾である相模湾・相模灘、駿河湾の豊富な水産資源、そして多数の温泉地など豊富な地域資源を有しており、伊豆半島は、まさに「火山の贈りもの」と呼ぶにふさわしい地域であると言えます。

4.2 修善寺温泉

修善寺温泉は、伊豆半島最古の温泉地であり、伊豆半島が本州と接続した後の約100万から50万年前に噴火を繰り返した達磨山火山の北東側の谷に位置しています。修善寺温泉の谷沿いには伊豆半島が海底火山だった時期に堆積した火山灰や軽石からできた多孔質の岩盤が分布しており、この透水性の高い岩盤（主として凝灰岩）を通じ、温泉が湧出しています。

4.3 修善寺温泉周辺の自然資源

火山活動によって形作られた伊豆半島の自然景観は、ジオパークの貴重な地球科学的な学術資源です。修善寺温泉を流れる桂川沿いの渓谷をはじめ、滝や海岸の絶景、伊豆半島の沿岸とこれを取り巻く豊かな海域、大室山などの火山地形、天城山系などの多くの自然景観が残されていることがか

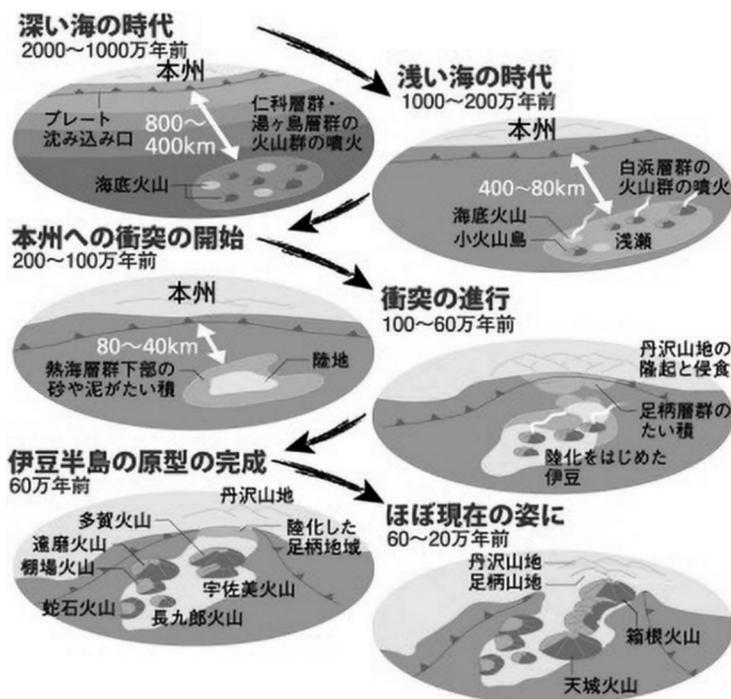


図 8 伊豆半島の形成 (日本ジオパークネットワーク HP より)

https://geopark.jp/geopark/izu_hantou/

ら我が国を代表する自然の風景地として富士箱根伊豆国立公園にも指定され、伊豆半島地域の重要な観光資源となっています（図9）。

また、国立公園内には全国的にもよく知られた温泉地が多数立地し、自然探勝やダイビングなどの自然を生かしたアクティビティを楽しむ利用者の宿泊拠点として重要な役割を担っています（図10）。

修善寺温泉からアクセスが容易で、温泉地に滞在しつつ、自然の恵みを感じることができるジオサイトにも指定され、伊豆半島の代表的な自然景観については、次のような場所が挙げられます（伊豆半島ジオパーク推進協議会，2024）。

①旭滝

修善寺温泉からも近い旭滝は、長さ105m、落差90mの伊豆半島で最も落差の大きい滝。岩盤は柱状節理が横倒しになったもの。幾何学模様の岩盤と新緑や紅葉とのコントラストが見事です。

②浄蓮の滝

約1万7,000年前に噴火した鉢窪山（はちくぼやま）の溶岩は狩野川上流の本谷川（ほんたにがわ）に流れ込み、なだらかな溶岩台地と浄蓮の滝をつくりました。滝の崖に美しい柱状節理を見ることができます。

③修善寺温泉と桂川

807年に空海によって開かれ、鎌倉幕府の2代将軍・源頼家が幽閉された歴史ある温泉。桂川沿いには、伊豆半島が海底火山だったころの噴出物を見ることができます。

④達磨山

約100万～50万年前に噴火を繰り返した伊豆半島を代表する大型陸上火山。稜線上のトレッキングでは、駿河湾、富士山、南アルプス、箱根まで大パノラマを満喫できます。

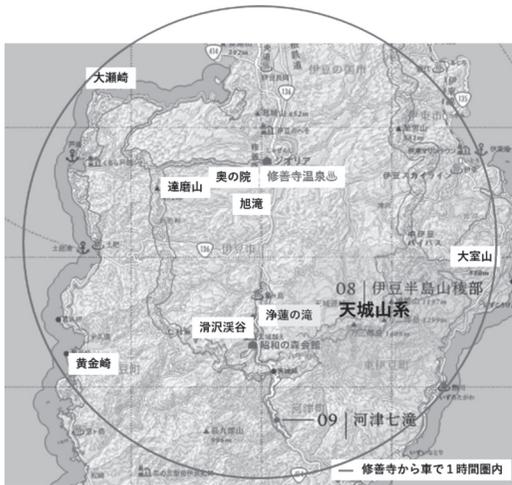


図9 修善寺温泉周辺の自然景観資源



図10 伊豆半島の主要な温泉地

⑤滑沢溪谷

狩野川の支流、滑沢溪谷の底につづく滑らかな一枚岩は、谷を埋めて流れた溶岩であり、その表面には美しい節理（溶岩が冷却する際にできた割れ目）が刻まれています。

⑥大瀬崎

砂嘴（さし）地形で、湾内は伊豆半島有数のダイビングポイント。先端には神池と呼ばれる池があり、海の直近にもかかわらず、淡水の池となっており、要因は未だに明らかになっていません。

また、この砂嘴には樹齢1,000年を超えるビャクシンの樹林があり、国の天然記念物になっています。

⑦黄金崎

海底火山の噴出物が温泉水や地熱の影響で成分が変化し、黄白色の岩を形成しています。富士山や西天城山系を望むことができます。

⑧大室山

約4,000年前の噴火でできた直径約250～300mほどのすり鉢状の噴火口を持つ火山。古くから行われてきた「山焼き」事によって、火口地形や草草が維持されています。

修善寺温泉にある修善寺総合会館内に整備された施設「ジオリア」では、伊豆半島の成り立ち・地質・地形の不思議などを、最新のプロジェクトンマッピングや大型スクリーン・顕微鏡などを使って分かりやすく解説し、『伊豆半島ジオパーク』の面白さを目で見て触れて体感しながら学ぶことができ、半島形成の歴史や大地のダイナミズムを感じながら伊豆半島の自然景観について、理解をより深めることができます。

4.4 修善寺温泉の歴史・文化資源

修善寺温泉は、鎌倉幕府の中心となった鎌倉市からも近く、鎌倉時代を中心とした歴史・文化的な資源も豊富に残されています。

名前の由来となっている修善寺は、807年に弘法大師（空海）が開いた寺院とされています。現在の修善寺の御本尊である大日如来坐像は、昭和59年の解体修理中に「1210年 実慶作」という墨書きが発見され、平安時代後期から鎌倉時代を中心に活躍した運慶や快慶などで著名な仏師集団である慶派の幻の仏師といわれた実慶の作品として初めて発見されたものであり、その後伊豆半島の他の場所でも実慶の作品が確認されています³⁾。

この大日如来坐像は、平成5年に国の重要文化財に指定されている貴重な文化資源です。

また、修善寺温泉街付近には、謀略によって修善寺に幽閉され、笥湯（はこゆ）で殺害されたとされる源頼家をはじめ源氏や北条政子にまつわる史跡が多く残されており、修善寺から桂川を挟んで向かいの高台にある指月殿（しげつでん）は、鎌倉幕府第二代將軍頼家の冥福を祈って建造したもので、伊豆半島で最古の木造建築とされています³⁾。

このほか、修善寺温泉をはじめ伊豆半島の温泉地は、川端康成、芥川龍之介、夏目漱石、太宰治、井上靖など、日本文学の著名な作家が逗留し、多数の作品を生み出した「近代日本文学の聖地」でもあり、文学作品の舞台となった場所や作家のゆかりの宿やゆかりの地も多く残されています。

これらの修善寺の歴史的背景、温泉地を舞台とした作品の風景やストーリーと照らし合わせて温泉地を巡ることで、より深い体験として温泉地の滞在に付加価値を付けることができる地域と考えられます。

4.5 伊豆半島の生態系とその恵み

伊豆半島の東側に連なる天城山系は、夏期に太平洋からの湿った風が当たるため年間降水量が4,000mmを超える国内有数の多雨地帯となっています。天城山（天城山系）は日本百名山にも数えられ、縦走路沿いには貴重な太平洋側のブナの天然林やヒメシヤラの天然林が残され、生物多様性の保全の観点からも貴重な自然生態系が残される地域です。

この天城山系の多雨な気候と豊かな森に涵養された清流によって、わさびの栽培が盛んになり、伊豆半島の名産となっています。また、豊かな森林に囲まれたわさび田は多様な水棲生物の生息の場となるだけでなく、天然のダムとしての機能も果たしています。

伊豆半島の東側に位置する相模湾・相模灘、西側に位置する駿河湾は、プレートの沈み込み帯に位置し、伊豆半島の形成とともに湾が形成され、富山湾とともに日本三大深湾と呼ばれ大陸棚がほとんどなく、沿岸近くから深く沈み込み、場所によっては水深2,000mを超える深い海域となっています。

両海域は、狭い湾内の鉛直方向に深い水深を持つことから多様な環境が見られ、生物多様性が非常に高く、約3,000~4,000種と言われる日本に生息する魚類のうち、相模湾では約1,300種、駿河湾では約1,000種類の魚が獲れ、日本近海で漁獲できる魚の4割以上を伊豆半島の周辺海域で漁獲することができるなど、豊富な水産資源にも恵まれています。

伊豆半島は、陸上のわさび栽培をはじめ、日本一の漁獲を誇るキンメダイやイセエビ、駿河湾のサクラエビ、しらす、タカアシガニなど豊富な食材に恵まれており、温泉地で味わう「食」も伊豆半島の温泉地滞在の大きな魅力です。地域の食材は、地域の自然の中で育まれるものであり、半島や海域など豊かな食材を育む生態系の成り立ち、人々の生活の中と食文化の形成、生産の場から食卓へ並ぶ食材の流れなど、単に食べるだけでなく、地域の個性や魅力としてより興味を深めることができる素材であり、伊豆半島はこれらの資源に恵まれた地域と考えられます。

5. ま と め

地域資源は、その地域ごとの自然の成り立ちや自然と人との関わりなどによって異なり、これが地域を特徴付ける個性や魅力（アピールポイント）になります。また、自然が育んだ資源は、イベントなど新たに人が作り出すコンテンツと異なり、地域において普遍的価値を持つため、持続可能な温泉地を作るための重要な要素になると考えられます。

本報告では、地域資源をいかした温泉地の活性化という観点から、修善寺温泉が位置する伊豆半島の地域資源について、地球科学的な成り立ち、歴史、食などを中心に取り上げてみました。

近年、国内外問わず、旅行者のニーズは、「もの」から「こと」の消費に、定型化された旅行商品から個々のニーズに応じた選択へと変わりつつあると言われており、温泉地での滞りで「できること」、「得られること」にも多様性と柔軟性が求められる状況下にあります。先般、地域のプランディングや活性化等に携わっている専門家の先生にお話を伺う機会があり、この中で「プランディングとは、製品やサービス、地域が持つ独自の価値や個性を明確にし、それをターゲットオーディエンスに伝えるプロセスである。」というお話をされていました。

温泉は、地球の地殻活動から得られる自然の恵みであり、現在、我々が見ることができる自然環境について、地球科学的な形成の過程やこの結果として理解した上で、地域の人々との関わりや温泉を取り巻く様々な自然的・社会的な要素とのつながりを認識することが、それぞれの温泉地の個性や独自の魅力を再構築する第一歩になるものと考えています。

伊豆半島に限らず全国の温泉地において、まず、温泉地の成り立ちや温泉地周辺の様々な地域資

源を洗い出し、単に別個の資源としてではなく、これらの地域資源と温泉、地域資源と地域資源のつながりをストーリーとして整理し、新たな選択肢として、温泉地での多様な楽しみ方を提案して行くことが、温泉地の魅力や柔軟性を高めることにつながり、持続可能な温泉地の形成、更には地域全体の活性化に寄与するものと期待をしています。

引用文献

伊豆半島ジオパーク推進協議会 (2024) 伊豆半島ジオパーク公式 web サイト

(<https://izugeopark.org/> 2024年8月31日閲覧)

伊豆半島ジオパーク推進協議会 (2016) 世界ジオパークネットワーク加盟申請書 (英文, <https://izugeopark.org/> 2024年8月31日閲覧)

観光庁 (2023) 訪日外国人消費動向調査 年間報告書 2023

(https://www.mlit.go.jp/kankocho/tokei_hakusyo/gaikokujinshohidoko.html 2024年8月31日閲覧)

環境省 (2022) 温泉に関するデータ (<https://www.env.go.jp/nature/onsen/data/> 2024年8月31日閲覧)

環境省 (2024) 新・湯治とは (<https://www.env.go.jp/nature/onsen/spa/index.html> (2024年8月31日閲覧). 日本ジオパークネットワーク (2024) 伊豆半島の形成

(https://geopark.jp/geopark/izu_hantou/ 2024年8月31日閲覧)

修善寺温泉観光協会 (2024) 修善寺温泉と歴史

(<https://www.shuzenji-kankou.com/index.html> 2024年8月31日閲覧)